

ディアナの鏡-東西の水の女神をめぐって-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学経営学部人文科学研究室 公開日: 2009-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 居駒, 永幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4236

ディアナの鏡

東西の水の女神をめぐる

居駒 永幸

一、神秘なるネミ湖

古代アリキアの街、ローマの南郊外は、乾いた赤っぽい平地から丘陵地帯になる。楕円形の帽子をかぶったようなイタリア松の点在する風景が、アルバの山稜にさしかかると、丘陵と深い谷の森に変わる。古代のアリキアは、そのような幽谷の森に囲まれた丘の上に栄え、いまはアリッチャAricciaと呼ぶ街が往時をかすかに偲ばせる。古代ローマ時代、このアリキアの人々は、近くのネミ湖Lago di Nemiの森で女神ディアナDianaの祭儀を執り行い、ディアナの神話を伝えていたのだった。

一九九七年の夏、私は古いアリッチャの街を訪ねた。テルミニ駅から地下鉄A線の終点アナニナ駅に行き、バスに乗り換えて約1時間、帝都ローマと港町カブアを結ぶ執政官道路として名高い、かのアッピア街道沿いにそれはあった。アルバ湖とネミ湖の中間に位置し、ローマからは三十キロメートル程離れている。街の中心の共和国広場に立つと、家々を背負ったいく筋もの山稜が平原に足の指のように突き出しているのが見える。稜線と稜線の間は深い谷で、それを橋がつなぐ。川ではなく、丘と丘をつなぐ橋なのだ。深い谷の森に一九世紀のアリッチャ橋が架かっている。渡ったところがキージ宮や教会のある先

の広場だ。ネミ湖に行くには、さらに隣街のジェンツァーノGenzanoまで行き、そこからネミ行きのバスに乗るか、湖畔に下っていく道を十分ほど歩くかのどちらかである。

フレージャー「金枝篇」の魅惑　ネミ湖に誘われる思いは、イギリスの人類学者J・G・フレージャー (James George Frazer, 1854～1941) が生涯をかけて書いた名著「金枝篇」(The Golden Bough) (十三巻、一九三六年) によってかきたてられる。

たれかターナー描く「金枝」という絵を知らぬ者があるう。この絵はネミの小さな山の湖——古人のいわゆる「ディアナ(ディアナ)の鏡」の夢幻的な想像図であって、画面は幻の金色の輝きをもって隈なく覆いつくされ、ターナーの聖なる心はこよなく麗しい自然の姿をすら深く染めて、それを神々しいものに変えている。アルバの山の緑の窪地にたたえたあの静寂な自然の湖を見た者は、永久にそれを忘れることはできない。この湖の畔に眠る二つの特色あるイタリアの村も、湖面にまで峻しく降る雑壇式庭園のあるイタリアの宮殿も、決して風景の幽寂と孤独のおもむきを妨げはしない。ディアナは今もなおこの淋しい湖畔をしたい、いまなおこのあたりの森林に出没するのではあるまいか。

(永橋卓介訳「金枝篇」一九五一年)



写真① ネミ湖全景（筆者撮影、以下同じ）
右端の建物がネミ湖博物館。中央部の畑のあたりがディアナ神殿跡。

この魅惑的な冒頭の一節は、どれほど多くの人の心を引きつけてきたことか。まるで一編の詩を読むように、ディアナ神話に彩られたネミ湖の森へと想像の翼を羽ばたかせるのである。深い緑の森に包まれた一粒の真珠のような湖、いまは崩れて円柱のみを残す白い大理石のディアナの神殿、私たちのイメージはこんなふう膨らんでゆく。そして、ディアナの深い森を映す美しさのゆえに、また彼女の麗しき姿を映し出す手鏡にもなぞらえて「ディアナの鏡 (Diana's Mirror)」と人々が讚えた、かのネミ湖へ誰れしもが一度は行ってみたいと願うのである。それほどに衝撃力をもつ文章であり、それ自体が実はフレージャーの語る神話だったのだ。

ネミ湖に降り立つ アリツチャからジェンツァーノまでは歩いて三十分の道のり。まるで街道の松のように、すっと幹を伸ばし、上の方だけふわりと葉を茂らせたイタリヤ松が道沿いに立っている。日本の笠松のようなが、笠のように鋭角的ではない。柔らかい楕円形だ。ローマでこの松をはじめて見た時、これこそターナーの絵によく出てくるイタリヤ松だと妙に感心した記憶がある。むろん、イタリヤ松とは私の勝手な呼称である。橋の下の深い谷の木の中に、波形の葉をいつぱいつけたオークも見つけた。後に述べるように、オークとヤドリギこそは、フレージャーが注目したもつとも神聖な樹木であった。古代アリキアの森はオークの大樹によって覆われていたのである。

ゆっくり風景を見たいと思つて、ジェンツァーノからさらに歩くことにした。鬱蒼とした木立の道をネミ湖へと向かう。突然眺望が開けて、緑に囲まれた湖が眼下にきらきらと輝いている。これがあの『金枝篇』のネミ湖かと、息をのんでしばらく佇む。青の湖面に点々と動く白いものは、よく見ると鷗だった。反対側の山の上に、ネミの街の赤レンガの建物が集まっていた。湖畔には家がまばらに見えるだけだ。

(写真①)

木立の道を下りきつたところに、ネミ湖博物館がある。見物人としていない、がらんとした建物に入ると、まずローマ時代の女性のブロン

ズ像がある。ネミの湖底から発見されたもののレプリカである。(写真②) ガラスケースにはテラコッタの小さなランプやコインなどの出土品が展示してある。ディアナの神殿跡の発掘やネミ湖から引き上げられた二隻のガレー船の写真パネルもある。ガレー船の年代はその後、テイペリウス帝(一四年〜三七年)の時代であることが判明したという。中央にはその復元されたガレー船が置いてある。権がたくさんついた平たく丸い船だ。露出した石畳の道は、神殿に続く道の一部らしい。想像の翼をたたんでネミの湖畔に降り立ち、ようやくディアナ神話の舞台をこの足で踏みしめた。



写真② ネミ湖のブロンズ像

ネミ湖のブロンズ像 外に出て、神殿跡に行ってみる。しかしそこはオリーブやブドウなどの一面の果樹園で、山の斜面に農園主の家が点在するだけだ。木の植わっていない一角があり、そこがかつて発掘されたディアナの神殿跡の一部であるとかろうじてわかる。段々畑の斜度は急に険しくなると、山の斜面に乗り出すようにネミの街の赤レンガが建っている。湖畔には、フレイザーが記す二つの村や雑壇式庭園の宮殿は、いまはない。ディアナを祀った深い森も、想像した大理

石の円柱遺跡もない。ただ、農園のどこかな風景が湖に調和し、その上を水鳥の羽ばたきのように、ゆっくりとした時間が流れている。

それにしても、博物館で見たブロンズ像はいつたい誰だろう。そのことがずっと頭から離れない。薄い衣を肩から足元まで着垂らし、右手を伸ばした優雅な女性像だ。上品な顔だちで、頭にディアデム冠を飾り、首には太い輪状の首飾りをしている。ガレー船の中から引き上げられる時、近くに七体の、やはり女性の小像があったという。湖に沈んでいたブロンズの女性像は、フレイザーがこのあたりの湖畔や森林に見ようとした女神ディアナなのだろうか。なぜ、ガレー船とともに湖に沈んだのだろうか。いや沈んだのではなく、ネミ湖の祭祀が何らかの事情でできなくなった時、水の女神として湖に沈められたのかもしれない。いずれにしても、ネミの湖畔に祀られたディアナは、崇高なる水の女神として信仰されたのではないか。

水の女神を探求するディアナ巡礼の旅は、まずはフレイザーの『金枝篇』をガイドブックにターナー「金枝」の絵からネミ湖のディアナ神話へと辿り、さらに東に足を伸ばして日本古代の水の女神にまで及んでいくことになろう。

二、ターナー「金枝」の謎

フレイザー「金枝篇」の仕掛け フレイザーがライフワークのタイトルに「金枝」の語を用いたのは、ターナー(J.M.W.Turner 1775〜1851)の同名の絵に因むものであることを、すでに引いた最初の一行で示している。ターナーの「金枝」(The Golden Bough 1834)という絵は、ネミ湖のディアナ祭祀に関するフレイザーの学説にとって象徴的な意味をもっていた。また逆に、フレイザーはターナーの著名な絵に自説を結びつけ、学問的価値を高めようとしたとも言える。それはフレイザー自身が、一八八九年十一月、出版社のマクミランに宛てた手紙の中で、口絵にターナーの「金枝」の使用を条件にしていることから



写真③ ターナー「金枝」

わかる（内田昭一郎・吉岡晶子訳『図説金枝篇』一九九四年）。

フレーザーが執着したターナーの「金枝」の絵は、中央右奥に山に囲まれて白く霞む湖、中央に腰布をつけた六人の踊る女、右の前景にイタリア松の下に二人の裸婦が横になり、前景左にはやはり腰布をつけただけの裸婦が右手に丸刃の鎌を持ち、左手で金枝を高く掲げて立っているという構図である。（写真③）『金枝篇』を読む者は、ターナーの描く白く霞む湖が「ネミの小さな山の湖」であり、『ダイアナ（ダイアナ）の鏡』の夢想的想像図」というフレーザーの解釈によつて、かのネミ湖であることを強く印象づけられる。ターナーの夢想的な湖がダイアナ神話のネミ湖に重なって見えてくる、というフレーザーの仕掛けが『金枝篇』に内在するのである。フレーザーは湖で金枝をもつ女神の絵でさえあればそれでよかつたのだ。実際にフレーザーはこの詩的な一文を書く時に、まだ実物の「金枝」の絵を見ていなかったとさえ言われている（前田耕作『ダイアナの森』一九九八年）。英雄叙事詩「アエネイス」こうしてターナーの「金枝」は、ネミ湖のダイアナ神話を象徴する絵として、フレーザーに巧みに仕立てられていった。しかし、ターナーの白く霞む湖は明らかにネミ湖ではないし、金枝をもつ女神もダイアナではない。古代ローマの国民詩人、ウェルギリウスの「アエネイス Aeneid」という英雄叙事詩に取材した絵なのだ。アエネイスとはトロイアの英雄で、トロイア陥落後さまざまな苦難の末にイタリアを平定し、ローマに新トロイアを建国するという偉業を成し遂げた人物である。

いま英雄と一隊は、ダイアナ女神の聖林に、到りついて金色に、かがやきわたるアポロンの、館のやねの下に立つ。

（泉井久之助訳「アエネイス」一九七六年）

クマエ（今のナポリ近辺）の岸辺に着いたアエネイスは、アポロン神の巫女シビラを訪ね、亡父に会うためには冥界の王に奉獻すべき金葉の小枝が必要だと教えられる。このクマエにもダイアナ女神を祀る聖林とアポロンの神殿があったという。

ある木にかくれて一本の、金の葉を持ちしなやかな、葉柄つけた枝があり、地下の世界のユーノーに、聖猷されたものという。……けれども先きに金の髪、持つこの枝をその木から、椀ごとらなくば地の下の、秘密の国へは何人も、はいることは許されぬ。……故に汝も高々と、目をくばりつつ見つければ、手ずから正しく手折るがよい。

金葉の小枝こそは冥界を往還するための呪物なのであった。深い森の中でさまよい探していると、鳩が現れてアエネーイスをその小枝にいざなう。

その木の枝の間より、大気を五彩に染めながら、黄金の光は迸し、そのさまあたかも林中に、親ではない樹にまといつく、寄生木の葉が凍りつく、冬にも繁って、新緑に、映える黄色の実をつけて、まるい幹をとりかこむ、あたかもそのような金の葉の、姿は暗い樹に映え、微風に金片音立てる。見るなりアエネーアース、幹去りがてにする枝を、貪るように引きちぎり、巫女シビュラが、いる家へ、それを携え持つてゆく。

黄金の光を放つ金枝は樹に生えた寄生木であった。アエネーイスは金枝の呪力の加護によって冥界の亡父から預言を聞き、無事地上界へもどってくる。

ターナーの「金枝」の絵は、アエネーイスの冥界めぐりに先立つ、このようなシビラによる金葉の小枝の教示をモチーフとして描かれている。したがって、金枝を掲げる裸婦は巫女シビラであり、ほの白く霞む湖も、もちろんネミ湖ではなく、ウエルギリウスが、

アウエルヌスへの降り道は——。日夜をとおして暗黒の、デーウス（冥界のブルトロー王）の門はあいている。

とうたつたアウエルヌス湖なのである。ここに至ってもはや、アウエルヌス湖をネミ湖とし、巫女シビラをそこに祀られるデアアナ女神とする、フレイザーの意図的な読み替えは明らかである。そのようなフレイザーのあからさまな誤解を認めた上で、なおかつターナーの「金

枝」の方にも謎めいた部分があることは否定できない。

ターナーの「ネミ湖」連作　ターナーは一七九〇年代末、クロード・ロランの絵「アエネーアース」に出会い、リチャード・ホアによるアウエルヌス湖の素描をもとに、アエネーイスの絵を描いた。この第一作には、ネミ湖をよく描いたりチャード・ウイルソンの影響が強いという（「ターナー展・カタログ」一九八六年）。第二作は、中央に湖を配し、岸辺に金枝を持つシビラとアエネーイスを写実的に描いた「アウエルヌス湖——アエネーアースとクマエのシビラ」（一八一四年）である。ウエルギリウスの叙事詩の、シビラとアエネーイスが冥界に行く場面を忠実に描いたものだ。同じ頃の作に「デイドとアエネーアース」もある。こうした一連の「アエネーイスもの」として、一八三四年にいま問題の「金枝」が描かれる。ところが、この絵にはアエネーイスの姿はなく、シビラの他に六人の踊る女と二人の座る女に変わっている。前作では中央に描かれた青く澄んだ湖も、右奥にぼんやりと後退してしまっている。

この「アエネーイスもの」に並行して、ターナーには「ネミ湖」の連作がある。それは先のウイルソンの影響とともに、一八一九年、初度のイタリア旅行でネミ湖を訪ねたことが直接のきっかけであろう。「金枝」を描く少し前の一八二八年、二度目のイタリア旅行の時に油彩の「ネミ湖」を描いている。全体の輪郭が不鮮明で、中央に白くぼんやりとしたネミ湖が配置される。人物はなく、この風景はやはり「記憶と想像の産物」（テート・ギャラリー所蔵ターナー展、カタログ、一九九七年）であろう。続いて一八四二年に第二作、さらに晩年にも一層醜化した水彩の「ネミ湖」（一八四八、五〇年）がある。

湖水の女の神話象徴性　ターナーにはこのように「ネミ湖」の連作があり、問題の「金枝」の湖はその白くぼんやりとしたところ、一八二八年の「ネミ湖」にきわめて近い。この絵は「アエネーイスもの」に「ネミ湖」が合流したような印象なのである。「金枝」の方にも「ネミ湖」に紛れる要素がなかったわけではないのだ。「金枝」に前作の「ア

ウエルヌス湖」の写実性が後退していることは前述の通りであって、アエネーイス叙事詩の物語性が希薄化した分、神話的な寓意と象徴性が強調されている。ターナーにとっては、アウエルヌス湖かどうかはあまり問題ではなかったであろう。それと関連してこの絵にはまた、おもしろいエピソードが伝わる。ターナーは前景に裸婦を描き加えることを決め、スケッチの紙を張りつけたらしい。しかし、色付けするのを忘れたまま売ってしまった。その後紙が剥がれたのを指摘されたターナーは、持ち主を訪ね、中央に三人の裸婦を描いたという (Robert Cunnning Discovering Turner, Tate Gallery 1990)。この謎めいた話も、「金枝」において人物の物語性に無頓着なターナーの一面をもの語っている。

私はネミ湖を訪ねる前に、ロンドンのテート・ギャラリーに立ち寄って「金枝」の絵を見たのだ。何度か見ているのだが、その時、金枝をもつ女が湖面に足を浸して立つことに気づいて強い印象を受けた。「金枝」の絵が前作と異なることの一つは、この左側のシビラなる女性が湖面に立ち、右手には金枝を刈り取った丸刃の鎌を持つ点だ。ウエルギリウスの叙事詩ではアエネーイスが金枝を刈り取るようになってくるから、この変化はターナーの芸術的直観と言えらる。よく見ないとわからない松の下の蛇と狐も前作にないものだが、これについては、ターナー研究家ジョン・ゲージによって、冥界の寓意になつてることが指摘されているという (富士川義之「マモンの神——ターナーとラスキン」『逸脱の系譜』一九九九年)。そしてこの神話的な寓意は湖水に立つ女性にも及んでいはずだ。すなわちそれは、湖に現れた水の女神が冥界に行くアエネーイスを救済し、英雄として再生させる寓意と読み解くことができる。フレージャーが抱いたネミ湖の女神ディアナのイメージは、「金枝」に描かれた湖に立つ女の神話的象徴性に緊密に重なっていくものであった。フレージャーの「あからさまな誤解」は言い換えれば、人類学的直観によるターナーの芸術的直観への次元を超えた架橋でもあったのだ。

三、ネミ湖の水の女神ディアナ

キュベレとアルテミスからディアナへ、ディアナのギリシャ名はアルテミスである。狩猟を好み、子供や動物の多産と守護を司る女神で、月と夜の女神や地母神としても崇拜されたと見られている。ギリシャ神話には、アクタイオンに泉で水浴する裸身を見られたアルテミスが激しく怒って鹿に変身させ、彼の飼った犬をけしかけて食い殺させるという残酷な話がある。純潔ゆえに激しい気性をもつ処女神であった。狩りに疲れると、深い谷の森に湧く泉の「輝く水で清浄な身体を洗った」(野上弥生子訳『ギリシャ神話』一九七八年) というのは、森の聖水によって再生する女神の姿をも示しているだろう。もともと、ギリシャ人にとってアルテミスは自国の根生いの神ではなく、この女神の原郷はもともと小アジアの森深きトモロス山にあったようだ。古くはこの地にアルテミスの原像ともいべき地母神キュベレが祀られていたが、キュベレの神殿にある聖泉はアナトリア平原の一隅を潤したという (前田耕作、前掲書)。キュベレはアルテミスと習合し、その神格を受け継いだアルテミスは西方のギリシャに根づいた。さらに西進してローマ南のネミ湖でアリアン人の祀るところとなり、ローマ神話の女神ディアナが誕生したことになる。このように水の女神としてのディアナは、キュベレとアルテミスから継承した神格であったと言える。ネミ湖のディアナ祭祀、フレージャーは次のように語り出し、ネミ湖のディアナに奉仕する祭司は、彼を殺した者がその地位に就くという祭司職の継承に注目している。

その昔、この森の景勝地は、不可思議な、そして繰り返される悲劇の舞台であった。湖の北の岸、今日ネミの村が坐っている切り立つような絶壁の真下に「ディアナ・ネモレンシス」すなわち「森のディアナ」の聖なる森と聖所があった。……

ネミの聖所の神域には一本の樹があつて、その枝は一本も折りしとることを許されなかつた。ただ逃亡して来た奴隷だけが、もし

できるなら、それを一本だけ折りとることが許されるのであった。この企てに成功すれば、かの祭司と一騎討ちをする資格が与えられ、相手を殺すことができたならば、ここに「森の王」(Rex Nemorensis)の称号を帯びて、代りに治めることになる。古代人の一致した意見によれば、この運命の枝こそアイネイアースが死の世界へ冒険旅行を試みたとき、巫女の命令で折りとったところの、あの「金枝」(The Golden Bough)にはかならなかつたのである。

一本のオークに生えたヤドリギの枝を折りとった者に殺される森の王、その謎を解明するために『金枝篇』十三巻は書かれたと言つても過言ではない。このような人類学的命題に対する、「祭司の生命は一種の方法で森の中のある樹に結びつけられていた」というフレーザーの直観は、アイネイアースを助ける巫女の手の「金枝」に及び、すでに見たように、湖に立つ女を描くターナーの芸術的直観へと架橋するものであった。しかし、フレーザーのいう運命の「金枝」は、オウイディウス『祭暦』の一行につけられた「冗漫な脚注で触れられているにすぎない」(内田・吉岡、前掲訳書)とさえ言われている。だがむしろ、『金枝篇』は実証の言説で成り立つのではなく、人類学的直観による文学以前のテキストへの「壮大な『仮構』」(前田耕作、前掲書)と見るべきなのである。

ウエルギリウスの後輩であつた詩人オウイディウスの『祭暦』は、ネミ湖の伝説やディアナ祭祀について次のように記している。

ディアナ女神の森と沼とに仕える方よ、いま語られるあなたの事跡のもとへお越し下さい。ニンフよ、ヌマ王の奥方よ。

アリキアの谷の蔭深い森に囲まれてひとつの湖があります。いにしえより信仰のある神聖な湖です。ここには馬たちの手綱によつて八つ裂きにされたヒッポリユトウスが隠れています。それゆえ、この森には一頭の馬も近づけません。長い生け垣を覆い隠すように糸が結ばれ、女神への御礼の札がたくさんかかつていま

す。願の成就した女性が、しばしば、額に花冠を巻き、火を灯した松明を都から携えてきます。

この聖林の王権を握るのは腕つぶしが強く、逃げ足の速い者です。それぞれが倒してはまたすぐに同じように倒されます。小石の上をかすかに囁くように流れる小川があります。この水を、ほんのわずかですがすすくって、私はよく飲んだものです。この水の恵みを下さる方がエゲリア様、カナメ女神たちの愛する女神です。ヌマ王の奥方でもあり、相談役でもありました。

(高橋宏幸訳『祭暦』一九九四年)

この記述によつて、女性たちが遠くローマからもネミのディアナ神殿に松明を持ってくる様子が窺える。倒しては倒される聖林の王は、フレーザーを「殺される森の王」という主題に導いた伝説にはかならない。

水の女神ディアナ・エゲリア「エゲリア様」とは伝説上のローマ王ヌマの妻であるが、フレーザーはエゲリアがディアナの神域に祀られた「美しい滝となって湖に落下する清らかな水の精」であり、ディアナとは職能の関連する女神であつたと述べている。

『祭暦』のエゲリアの一節は、同じくオウイディウス作、ギリシャ・ローマ神話の集大成『変身物語』第十五章のエゲリア物語に基づくものである。

老いたヌマが、その生涯と統治とを終えたとき、ラティウムの女たちや、民たちや、元老たちは、ひとしくヌマの死を悲しんだ。妻のエゲリアは、都を捨て、アリキアの谷のみどり濃い森に身を隠した。オレステスがこの地に伝えた、ディアナ女神のあの祭儀が、嘆き悲しむ彼女の声によつて妨げられたという。……

彼女は、山の麓(もと)に身を横たえて、涙にかきくれる。とうとう、ディアナ女神が、夫の死を嘆き悲しむその貞節に心うたれ、彼女のからだを冷たい泉に変えると、その全身を溶かして、尽きることのない水にしたのだ。(中村善也訳『変身物語』一九八四年)

エゲリアがネミ湖のディアナの森に隠れる話は、「ディアナ自身職能を保有する」とフレージャーが示唆したように、ディアナの神格への習合、あるいは分有を意味するものであろう。ネミ湖に注ぎ込む聖なる泉は、出産や病気を癒し再生させる呪力を持った。そのような水の恵みを与える聖水の女神として、ディアナとエゲリアは信仰されたのだった。ディアナがエゲリアを泉の水に変身、再生させる物語は、実に興味深い。ディアナ自身が聖水を司る女神であることを示しているからである。そしてその神格は、ディアナの前身としてのアルテミス、さらには原像としてのキュベレから受け継ぐものでもあっただろう。ディアナは聖なる森の女神であると同時に、ネミ湖の水の女神の姿をもっていたのだ。

ここで再びネミ湖のブロンズ像を想起したい。その像はディアナだったのか、それともエゲリアであろうか。遺物にカリグラ帝の名があつたことから、カリグラの妻や祖母とする説もある。いずれにしても、カリグラが船中の神殿に勧請した女神であろうと考えられている（前田耕作、前掲書）。そうだとすればやはり、ネミ湖の主として祀られるべきディアナと見るのが自然だ。何よりも彼女は、ネミ湖の水の女神なのだから。カリグラの死後、ガレー船上のディアナ祭祀は放棄され、ブロンズの水の女神もガレー船とともに湖底に沈められたものかと思われる。さらにまた、フレージャーのことも及んでいくのだが、ターナーの「金枝」の湖水に立つ女をディアナとする「あからさまな誤解」は、彼がそこにネミ湖の水の女神の姿を求めていたとすれば、実に鋭い「誤解」であつたと言うべきではないか。

四、日本古代の水の女神

折口信夫の「水の女」さて、目を東に転じて、日本の水の女神を取り上げてみよう。日本古代の聖水信仰と水の女神の存在を明らかにしたのは、折口信夫であつた。折口は聖水を司る女性の信仰生活について

の、いわゆる「水の女」（「民族」一九二七―八年）の論を展開したことでよく知られている。キーワードは「みぬま」「みつは」であつた。

……をちの古川岸、こちの古川岸に生ひ立つ若水沼間の、いや若えに御若えまし、すすぎ振るをどみの水の、いやをちに御をちまし……

出雲国造神賀詞の末尾に出てくる、若返りを祝福する呪詞である。折口は「生立」を「おひたてる力」とし、古来難解の「水沼間（みぬま）」を「若やぐ靈力」に関わる語と考えた。「日向国の橋小門の水底に居て、水葉も稚に出で居る神」（日本書紀・神功皇后条）の「水葉（みつは）」も同様に、禊ぎの聖地に発現する「若やぐ靈力」に関係があると解釈した。さらにそこから「みぬま」「みつは」は、「みそぎの聖地に居て、聖水によるみそぎを施して、神または貴人の若子に靈魂を付け、その資格を完成せしめる水の女神」であり、「実際には水の女神の資格をもつてみそぎの儀礼を司る巫女であつた」（高梨一美「水の女」折口信夫事典一九九八年）と、折口は古代の水の女神像を描いたのであつた。「水の女」の論は聖水による再生復活の古代信仰を一つの核心としていて、

私は古代皇妃の出自が水界に在つて、水神の女である事並びに、其聖職が、天子即位甦生を意味する禊ぎの奉仕にあつた事を中心として、此長論を完了しようとしてゐるのである。

とあるように、天皇即位の秘儀を司る皇妃の起源へと掘り下げられていくものであつた。

「水の女」の入水譚 そのような「水の女」論から発展したテーマの一つに、「水の女」は異郷の女として本つ国に去つていくという、神話・物語の類型の問題があつた。折口はそれについて異郷の女との結婚という婚姻形態を想定した。実はこの考えはフレージャーのエキゾガミイ（族外婚）に着想を得た仮説であつた。明治時代末、柳田国男は南方熊楠からフレージャーの著作を教えられ、多大の影響を受けたことがわ

かっている(佐伯有清「柳田国男と古代史」一九八八年)。大正五年頃、折口は柳田の勧めでフレイザーの本を読み、翻訳までしている。フレイザーに関心を寄せた南方・柳田・折口と言えば、まさに日本民俗学を確立した系譜である。柳田はもちろん、折口もヨーロッパの学説に依拠するところがあつたのだ(中西進「キリストと大國主」一九九四年)。

耳無の池し恨めし吾妹子が来つつ潜かば水は酒れなむ

(万葉集 16・三七八八)

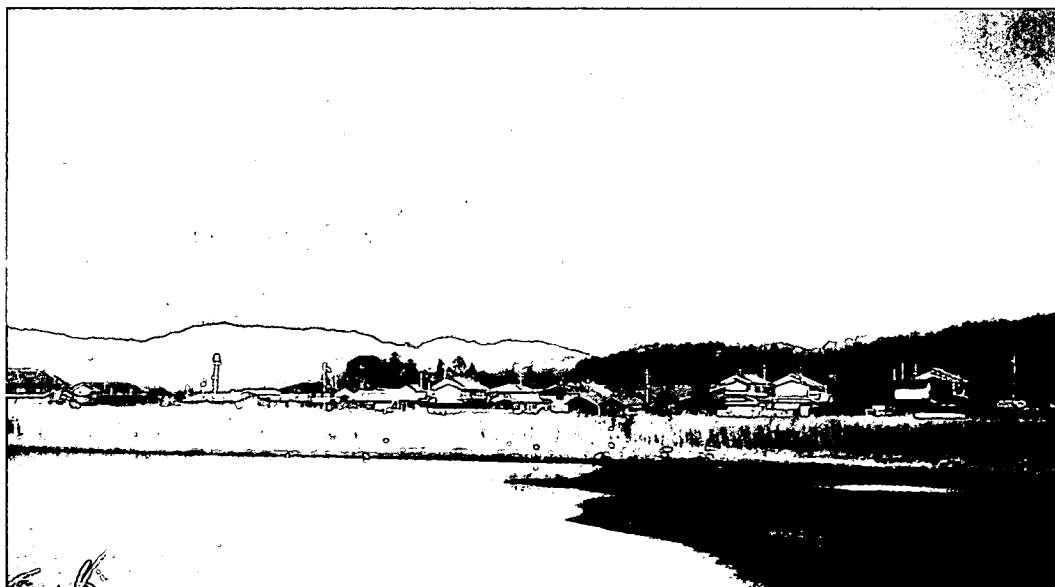
万葉集卷十六の「由縁ある并せて雑歌」の一首。題詞には三人の男に求婚された娘が、思い余つて池に身を投げ、「水底に沈没みき」とある。入水自殺を遂げる女は、万葉集では他にも「真間の手児奈」の例があり、古事記では垂仁天皇の妃として召された円野比売の例がある。円野比売の場合は醜いという理由で「本つ土」に返され、それを恥じて「峻き淵に堕ちて」自ら死ぬという話である。

折口は円野比売について、「水の女」の中で次のように述べている。

自殺の方法の中、身投げの本縁を言ふ物語を含んだものである。水の中で死ぬることははじめをひらいた丹波道主貴の神女は、水の女であつたからと考へたのである。

「身投げの本縁」とは、円野比売が異郷の女として「本つ土」へ去つていくという類型を指しているようだ。つまり、「水の女」としての円野比売は、天皇の妃の役目を終えると、「水の女」の世界へと帰っていかなければならないかつたということである。そうすると、耳無の池に身を投げた娘も入水した真間の手児奈も、「水の女」の類型として読み解くことができる。入水する「水の女」は聖水を司る水の女神の末裔であつたのだ。

泣沢の森と埴安池と藤原宮 耳無の池にほど近い香具山の麓にも、かつて埴安池があつた。藤原宮時代(六九四年〜七一〇年)に持統天皇が国見をし(一・五二)、大宮人が船を浮かべて遊んだ池だ(二・二五七)。柿本人麻呂は持統十(六九六)年に亡くなつた高市皇子の挽歌で



写真④ 泣沢の森
高所寺池から見た香具山の稜線。先端の小高い木立が泣沢の森。その左側は三輪山の遠景。

「香具山の宮」「埴安の御門」(2・一九九)を偲び、また次のような反歌を詠んでいる。

埴安の池の堤の隠沼の行方を知らに舎人はまよふ(2・二〇一)
泣沢の神社に神酒すゑ禱祈れどもわご大君は高日知らしぬ

(2・二〇二)

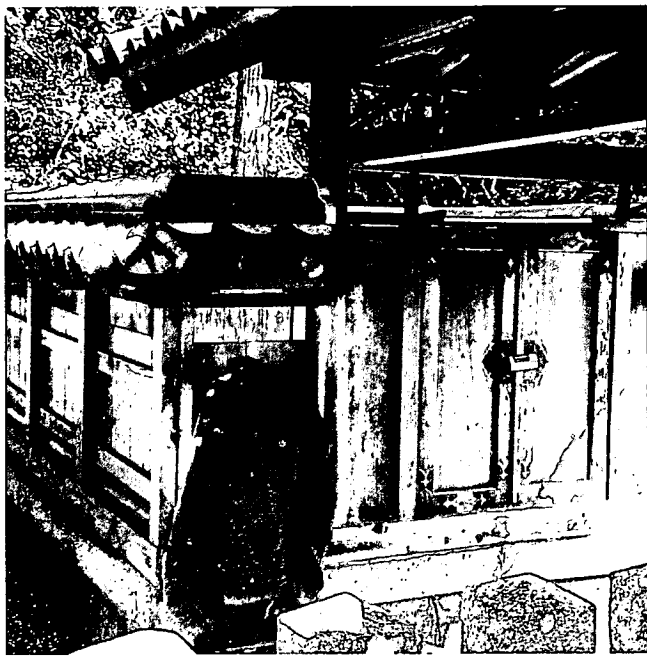
冬の晴れた一日、私は香具山の周辺を歩いてみた。藤原宮跡に立つてみると、東南になだらかな香具山が一本の木まで判別できるほど近くに見え、北の端にこんもりした泣沢の森が屋根の間からのぞいている。そこまでは一キロメートルしかない。香具山との間がちよっと高いのは、高所寺池の堤である。(写真④)香具山との間には南北に八釣街道があり、このあたりはやや低い。少し南の南浦町には北窪・南窪の地名があり、鏡池は埴安池の名残りだという(「大和志」)。埴安池は香具山の南から北にかけての西麓一帯にあつた。八釣街道の北から南を見ると、ちょうど泣沢の森が東西に塞ぐように茂っている。この森が埴安池の北側の堤になっていたのだろうか。

南浦の鏡池を探してみると、すでに埋められて町の建物が立っていた。近くにいた古老が、この池は近くの天岩戸神社で天照大御神を祭る時に禊ぎをしたので、その御神体に因んで鏡池と呼んだと教えてくれた。またこのあたりは昔から、南を流れる飛鳥川が増水するとすぐ溢れて泥沼になってしまうのだという。面白い話だ。反歌の「隠沼」は、水が流れ込んで淀む埴安池の有様でもあろう。このように見えてくると、泣沢女の神は藤原宮を守る水の女神として、埴安の湖畔に祀られたとも考えられるのだ。

埴安池の水の女神、泣沢女 イザナキはいとしい妻イザナミを亡くして、腹這いになって泣いた、その哀しみの涙に成った神が泣沢女の神である」と古事記は記す。

御涙に成れる神は、香山の畝尾の木本に坐す、名は泣沢女神ぞ。香具山の長くのびた尾根の先に木立に囲まれて鎮座する泣沢女の神という記述は、香具山から泣沢の森、すなわち現在の畝尾都多本神社

あたりの風景を的確に言い表している。この神社には本殿がなく、いまでも森の木立とそこに湧く井戸(泉)が御神体になっている。(写真⑤)ナキサワのもととの名義はごうごうと音をたてて流れる沢の水の性格化であつて、藤原宮の水神として埴安池の湖畔に祀られたと見られる。水の女神、泣沢女は記紀において、涙と水、葬儀での哭女という連想によってイザナキ神話に結びつけられたのであつた。この女神は葬儀における再生復活の祈願とも関係があつたようなのである。



写真⑤ 泣沢女の神
本殿はなく、堀に囲まれた井戸(泉)がある。

先の二首目の反歌には、人麻呂の作ではなく、ひのくまのおきみ檜隈女王が泣沢の神を怨んだ歌とする異伝注記がある。女王は高市皇子の娘と見られており、この歌は亡父高市皇子の再生を祈る女王の歌としてふさわしい。中西進氏は、泣沢の泉こそ古代日本人の生命の泉で、泣沢女は生命の復活を司る神にちがいないとし、生命の泉とその女神は古代ヨーロッパ神話にも見られることを指摘している（前掲書）。泣沢女は香具山かぐらやまから流れ出す氷の聖水信仰を背負った女神であった。聖水には一月読つきよみの持てる変若水へちまづみ（十三・三二・四五）とあるように、再生復活の呪力が存在すると考えられたのだ。しかし、女王は泣沢女の神の力も及ばず、高市皇子が天上高く日の神として統治することとなったとうたう。つまり、皇子の死を確認する歌なのだ。挽歌にはそのような意味があった。

藤原宮の人々は、埴安池の湖畔に茂る泣沢の森にこもり、水の女神、泣沢女に聖水による再生復活を願ってひたすら祈りを捧げたのであった。それ故、埴安池は、「ディアナの鏡」にならって「泣沢女の鏡」と言ってみたい気がする。そこにはネミ湖の水の女神ディアナに見てきたのと通じるものがあるからだ。このように森と聖水の女神がヨーロッパと日本の神話に普遍的に存在することを確かめて、ネミ湖のディアナから埴安池の泣沢女に至る長い旅を終わることにしよう。

八月三十一日、私はネミ湖にディアナを訪ねる旅から帰ってきた。驚いたことに、翌朝の新聞に英国のディアナ元皇太子妃の事故死が報ぜられた。三十六歳の若い、突然の死であった。ディアナ妃は人々の心のなかで女神ディアナになったと言えるだろう（松村一男「女神になった『ディアナ』」「ユリイカ」一九九八年十二月）。その後、柩は英国中部オルソープのスペンサー家に運ばれ、敷地内の湖に浮かぶ小島に埋葬された。「ジ・オーバル」と呼ばれる美しい湖であった。

ディアナの名をもつディアナ妃もまた、ジ・オーバル湖の水の女神になったのだろうか。